

## サークルまでい飯館村バスツアー感想集

私が飯館村を通ったのは、2013年の南相馬の野馬追の日。そのときは、真っ黒なフレコンバックがあちこちにあり、全村避難した村だから、人はいないのではないかというイメージを覆し、車の往来が多かったのを覚えている。ほとんどが工事車両だった。

それから、4年。長泥地区を除き、避難解除され、帰村できるようになった飯館村。フレコンバックは緑のカバーで覆われ、一見目立たない。きれいなセブンイレブン、きれいな道の駅、きれいな家々。大きな立派な全天候型のグランドを作り、新しい学校もできると聞いた。こどもたちがいつでも戻ってこれるようにならんだろう。

大きな可燃物置き場も目にした。きれいな道路の先には、可燃物焼却施設があると再生の会の田尾さんから聞いた。

「ハコもの政治」そんな言葉が頭をよぎる。

「までいの村」の飯館村の再生は、お金で片付けられようとしている。ただ、それを良しとするかは、住民次第。

私はここから貪欲に学びたい。もしも、自分の土地が傷つき、出て行かなくてはならなかつたとき、そして、また戻ってくるときに、どんなことが起こるのか。自分の身に降りかかる可能性は十分にある。普段から、何を見て、どう考えて生きるか。

オーソン・ウェルズ『1984年』を彷彿とさせる現在の世界・日本。言葉を大事に、行動をやめない。それが今の私にできること。朝火里津子

大震災発生後6年半に当たる日に現地入りして、その現状を見聞出来たことは大変良い刺激になりました。力強く主体的に復興事業に奮闘されている地元住民の方々と、これを支援する様々な組織の方々と面談して、そのご努力に感動しました。

一方では、復興がスタートラインに立ったと伺い、住民の多くの方々が帰村できるまでの多くの課題を垣間見るにつけ、これから復興事業の継続に何をお手伝い出来るのか考える良い機会を得られました。

風化しがちな復興事業のPRに努め、現地生産物の販売に少しでも協力し、「ふくしま再生の会」の持続的な運営に寄与するよう、微力を提供したいと熱い思いがこみ上げてきました。

網戸孝史

飯館村に入って、この8月開業の道の駅までい館に寄る。素晴らしい建物、広い駐車場、ただ、飯館村産の品がほとんどないのはなお悲しい。

村役場で、杉岡係長の村の復興に向けた取り組みを聞けたのは有意義だった。熱意のある若い村役場の人と村民がタグを組んで、再生に向かっていくことは必須だと思った。

いちばん館の非破壊簡易放射能測定器は使いやすくできていて、毎日村民が利用しているようだ。村民が自給の野菜や山菜などを自ら測定して、安全を確認して食すかどうか自己判断できるのは重要だ。

新しい小、中学校の建設、人工芝のゴルフ場?の建設も進められているが、そこで学び、遊ぶ人の顔は見えない。ユニークな飯桶小学校をはじめ他の小学校はどうなるのだろう?学んだ村民には懐かしい思い出とともにあるのではないか?もとから箱物行政の産物だったのか?

今なお帰還困難区域である長泥地区のバリケード前で。線量の高い、低いでの分断。長泥地区も含めた除染、再生を進めなければ-----。

比曾では、義人さんのイグネの放射線量、土壌、枯葉の測定調査に来ていた帶広畜産大の辻先生の一行と偶々会う。サークルまでいでは土壌、枯葉の放射能測定に協力して、メールでの

連絡はしているが、直接お会いして、話すのは初めて。おじまふるさと交流館で、田尾さん、宗夫さんと打ち合わせ。有意義だったと思う。

懇親会では、宗夫さんから、帰村と新しい村づくり／何を目指すのかの説明、田尾さんの補足説明を受ける、第二部では参加者の自己紹介、思いを話し、懇親を深めることができた。

佐須のふくしま再生の会飯館事務所では、ハウス、田圃などサンプル採取場所見学、宗夫さん、田尾さん指導による土壤採取、稲採取の実習、見学。夏の天候不順で稲の実りが心配されたが、稲の穂に実りが付いているので一安心。酒米、夢の香は緑のままで、実入りが少ないようで、収穫できるのか心配だ。

新しい佐須公民館、旧佐須小学校を見学、ハウスで作業をしていた菅野永徳さんが来てくれて、小学校の歴史の話をうかがう。古い校舎だが、それだけ思い出の詰まったところなのだろうな。壊してしまうと、そんな思い出までなくなりそうで-----。

山津見神社でも、火曜日で休みの日であったが、櫛宜さんもちょうど来られていて、案内をしてもらう幸運。おおかみ天井絵を見学。狼が大神である不思議。

前田を経由してあいの沢への小径は緑に溢れて美しかった。

小宮マキバノハナゾノでは、上の畑で作業していた大久保金一さんの話“親父が国有林との境に植えた一本杉が大きくなつた。別れの一本杉という歌があつたが、これからは出会いの一本杉にしたい”復興再生は、箱物を作ること（だけ）ではなく、一つ一つの出会いを大事にすることから始まるのではないか？人と人の出会いだけでなく、人と村の歴史、人と自然との出会いも大事にすることから。

私にとって、飯館村は、親父の出身地の愛媛の山奥の城川町（土居村、魚成村、黒川村の昭和の合併でできた町、今は平成の合併で西予市的一部分になっている）とイメージがダブる。飯館村に比べると面積も狭いが、水田風景が広がり、森林に囲まれ、牛、豚の畜産、地産のハム等も創っている。田植えの前には、毎年どろんこ祭りがあり、子供たちが田んぼに入って、泥んこになって遊ぶ。何のことない、これは子供を遊ばせて、雑草取り、代掻きをさせているのではないか？ 一石三鳥？ また、毎年、かまぼこ板の絵展覧会を行って、全国から1万点以上の応募がある。道の駅の建物は少し大きな八百屋のようだが、地産の野菜、山菜、栗などであふれている。

飯館村にはユニークなまでいライフいいいたての歴史がある。までい（真手、両手）、つつましく、心を込めて、丁寧に、村と村の人々の暮らしの再生を図ってもらいたい。そして、その再生に自分の感性、能力を生かして、協力したいと思う。伊井一夫

サークルまでいの皆さんとのバスツアーが実現することになった。

「飯館村見学」、うーん見学、なにか私にははじめないなあ。

「訪問」と心の中で変換してみる。うん、この方がおさまりがいいと納得する。

当日待ち合わせ場所に行くと「尚子さん一番最後だよ。」と言われてしまった。皆さん意欲満々、それぞれ飯館村に行けることを楽しみに張り切っていた。

村に入ると、除染の車や作業員の姿はなく、村全体が片付いてすっきりした感じがある。事故後無人となりいたんでいた家々が、建て替えられるあるいは補修されているようだ。

けれども、まだほとんどの気配がなく、さびしく感じる。

田んぼのあちこちに何段にも野積みされていた黒いフレコンバックは低くなり、グレーがかかったモスグリーンのシートで覆われていた。動物の擬態を連想した、、、。

確かに以前のブルーシートより風景の中で突出した異様さは和らいでいるようにも見えるが、こんなことで事態が変わったわけではない、ごまかされないと心の内で強く呟いている。

田んぼや畑は除染が済んだためだろう、勢高く茂っていた草はなく遠目には穏やかな風景に見えたが、田んぼの中には稲は育っていない。やはりまだまだなんだというのがよく

わかる。

村役場の復興対策課の方から村の復興のための対策、いろいろなかたちでの営農の再開に対する補助金や支援を具体化していく話を伺う。

一応の資金はあるが、それを活用していくことの難しさがうかがえた。

その後長泥のバリケード前で、道路わきの草むらに線量計を置いて測定してみる。予想していたが他の地域とは数値が全然違う。草むらの中に咲いている花々の可憐な無垢な姿がせつなかつた。

佐須の新しい事務所は、二階天井の梁に旧牧舎の梁を活かして使ったとのこと、佐須の生活がちゃんと繋がっていることを確かめられる気がしてうれしかった。

一階のキッチンで千恵子さんがきゅうりを刻んでいる姿をみると、なんだかほっとした。

ああここはやっぱり佐須のおうちだ。その家の主婦が家事をしているのが、こんなふうに愛おしく落ち着いて感じられるのは、本物だからだ(へんな表現だけど)と心に温かいものが満ちてきた。

小宮では金一さんが子猫4匹にそれぞれ○○姫と名づけて可愛がっている。

家の中を動き回るたくさんの命に囲まれて生活するのは、なによりの力づけと安らぎになっているようだ。金一さんは、みんなの到着が遅れたので「なんだか見捨てられた気がした。」と言っていたが、3, 4年前の金一さんだったらとても言えなかつたと思う。さまざまの人たちとの交流や、やりとりが、金一さんのうちに秘めていた想いに言葉を与え表出する力を生み出しているのだと思った。

今回は村の現場を見るということでしたが、こうして振り返ってみると、私はやはり人を感じてしまうんだなとあらためて自覚しました。ほんとうにささやかな、ささやかな活動（といついいのかな）しかできないけれど、自分がキャッチしたものは、大切に大切にして、村のひとたちとの交流に活かしていくこうと思っています。

さまざまなアレンジ、心配りをしてくださった田尾さん宗夫さんありがとうございます。

伊井尚子

1泊2日の良い企画に参加させて頂きありがとうございました。

普段は主として在京で火曜日の「までい」室での放射能測定サンプルの調製作業に参加していますが、今回私としては2年半ぶりに現地飯舘村のあれこれを見て回ることが出来て、事故後6年半・避難解除後半年の現状をしっかりと眼に焼き付け心に捉えることができました。これから先の皆さんとの協働・共生活動に対する私の気持ちにここでネジを巻き直すことが出来たと思っています。

宗夫さん宅の旧納屋が【ふくしま再生の会】の飯舘村新事務所として立派に整えられており、そこを中心にして我々の活動が多方面に力強く広がっていることを見てとても力強く思いました。 佐須の稲作試験田圃では稲穂がスクスクと伸びていました。来月早々にはもう6回目になる刈り入れを迎えます。今年も全袋検査は合格間違いないでしょう。 宗夫ハウス明大ハウスの2棟ではピーマンが元気に育っていました。 保存へ向かっている旧佐須小学校の建物では、そこが毎月行われている老人クラブや健康・医療ケア活動の現場であり、その活動のぬくもりが感じられました。 再建された山津見神社には再現されたオオカミの天井絵が掲げられ、それを説明する若い権禰宜さんの新たな意気込みが伝わってきました。 小宮のマキバノハナゾノでは、金一さんがその日も上の方で一人で黙々と作付けと耕起をしていてたゆまぬ作業の大切さと力強さを教えてくれましたし、みんなで植えたサクラの樹は一段と太くなっています。 新たに東大の学生が年々のケアを引き継ぐことになったというバラの花壇が出来てきました。

一方で目にした暗い側では、昔の豊饒な田圃の上にフレコンバックが異様に積み上げられた仮々仮置き場の状態がありました。表面5cmを剥ぎ取った上に山砂／川砂で客土して『除染完了』として放り出された不毛の広い田圃がありました。さらに75%の面積を占める除染予定の無い森林が控えても居りました。それらをどのように解決して行ったら良いのでしょうか。

うか。線量の高い長泥・比曽地区を回って、そこに住む義人さん啓一さんたちの苦悩は如何ばかりかと改めて想いました。

今回は見ませんでしたが、多くの訪問者を受け容れている靈山センターの活動があります。定的に放射線量の村内全域の測定作業を続けています。20行政区の土壤の放射能測定作業も村民を主体にして始まりました。ほかに、牧場再開をした人、花卉栽培を始めた人、ひまわり街道構築活動、・・・等々の動きを耳にします。

総括しますと、大災害に対して“様々に対処する人間の多彩な諸活動の積み上げ”が私に今後への大きな期待を抱かせてくれました。冒頭の“ネジまき直し”的感想はそれが所以です。

宇野義雄

大地震の前日から数日間たまたま外国旅行していたので、住んでいる横浜での震度5強の恐怖も経験せず、その後次々と起こった大津波、原発の爆発などの報道をリアルタイムで見聞きできなかった。それ故か自分の中にこの大惨事に対する現実感が少なく、一人取り残されているようだった帰国後、繰り返し流される被災地の衝撃的な映像をみると、現地の人と繋がる形で継続的になにかしなければと強く思うようになったものの現地には友人も知人もいない。新聞で福島の花見山を守る会を知り暫くボランティアとして通った。

一人で続けていく自信を無くした頃旧知の伊井さんに再生の会に誘ってもらった。今まで数回佐須と小宮へ作業をしに行ったことはあるが、ツアーでは飯館村の各所を回っていただき村の現状を知る事ができた。帰村できるようになったとは言え山林やあぜ道は除染されず完全ではない。大量の黒い袋の山々を見ながらではとても安住できないと心配になった。帰村者がまだ少ない事も気がかりだ。うれしかった事は山津見神社の天井画の復元に際して消失の前に一枚づつ写真が撮られていて幸運だったという感動的な話、小宮の金一さんの畑に自分も参加して植樹した桜が元気に育っていることを確認できたことなど。

東京のサークルまでいでのサンプル作りや今回のようなツアーに参加することで、現地の人と繋がりを持って何かしていきたいという思いが少しほとんど現実している気がした。遠藤幸子

この見学ツアーで意識が180度変わりました。以前は、津波被害を受けた場所の復興は当然だとしても、放射能で汚染された場所の復興は所詮無理だろうと思っていました。ところが、「汚染源を除去する方法がある、汚染されたものをクリーンにする方法がある、それを事故直後から5年間にわたってやっている人々がおられる、そして実際に少しづつクリーンになりつつある」ことを、今回知りました。飯館村がその土地の人々にとってどんなに大切な場所であるかも、もとの暮らしを取り戻したいという人々の願いがどんなに当たり前のことであるかも、よく分かりました。大雑把に「できる・できない」と言うのではなく、細かく丁寧に、土壤中の放射能は、作物の茎の放射能は、葉は、実は、と様々な条件下で測定し、記録し、科学的根拠に基づく判断と提案をしておられる皆様の、人間としての誠実な姿勢に感銘を受けました。汚れたものを清めてもとのように美しくするのは自然に対する、あるいは神に対する私たちの責任であり、義務であることを教えられた思いです。

加納孝代

9/11(月)~12(火)「サークルまでい」飯館村見学バスツアーに参加した。「サークルまでい」は、ふくしま再生の会が飯館村の現地から採取した土壤、野草、イノシシ・キジ等の動物、試験栽培した稲、野菜等、この5年間で2万数千点のサンプルの放射能測定を行いデータを蓄積する活動を東大農学部で行ってきた。その試料サンプルがどのように採取されているか現地へ行って見て、体験させて頂くことにした。もう1つは、帰村が始まって半年が経ち、村がどう変化したかを見ることが今回の目的である。

佐須地区の田圃だった所が今はコスモス畑になっていた。そこで採土器を使って土壤採取体験をさせて頂いた。土が硬くてかなりの労力を要した。実際は水を含んだ土だったりいろんな土壤の状態によって、採取方法を変えて苦労されていることが理解出来た。国による除染で出した大量の汚染土壤が、緑のシートに覆われたフレコンバックの山となって実り豊かだったであ

ろう田圃を隠している。何とも悲しい。事故直後の村は放射能の線量は高いのに、緑豊かで綺麗な村に見えた。しかし今はフレコンバックの山によって放射能被災が可視化されていると思った。国からは多額の復興予算が投じられていると聞いた。全天候型グランドの設置、綺麗な小中学校校舎の建設が進んでいた。都会的な施設を建てて、飯館村のまでいな暮らしに添っているのだろうか？現実の災害を見えないものにしようとしているのでは？ そんな疑問を感じた。

帰村を決意された方が『ゼロからの出発ではなく、マイナスからの再生ですよ。』『孫の代、その次の代が戻って来られる様に自分は頑張る』と言っておられたのを思い出す。こうした村の方の志を応援してサークルまでいの活動を続けていきたいと思います。 齋藤富子

今回のツアーの目的は2つあり、飯舘村の現状を知り、採取現場をみるというものであった。

1つ目については、これまで閉鎖中の建物の前を通るだけであった村役場で職員の人から村作成のパンフレット『までいライフいいたて』『飯舘村営農再開ビジョン』を見ながら村の現状について説明を聞いたこと、いちばん館で村の人が自分が食べる食品の放射能を直接、自動測定できる測定器を見学したことが収穫であった。

2つ目については、までい室には、飯館村で採取された土壌や米、野草、きのこその他が放射能測定のために届くが、かねてから、現地でそれらが、どんなふうに採取されるか知りたいと思っていたが、今回のツアーで、それが実現した。

特にまでい室で羊糞とよんでいる30cmの棒状の土壤の採土実習は興味深かった。これは、地上から30cmの深度までの土壤を採取して、放射性セシウムの層別分布を調査するために実施されている。採土に用いるライナー採度器は、もともと土壤のダイオキシン調査のために開発されたものらしいが（ネットで検索すると1台145,950円と高価）、金属製の円筒状採土器にプラスチックの円筒状ケースを装着して用いる。これを採取地にハンマーで打ちこみ、土壤を採取して、ハンドルで引き上げ、土壤の入ったプラスチックケースを回収後、ふたをして、採取地その他を記入して、までいに送られる。打ち込み、引き上げにはかなりの力と要領が必要で、器具が土壤で汚れるので、バケツ持参でその度に洗うとのことだった。までい室で、羊糞を処理する時、これまで、どちらが底か迷うことがあったが、今回、蓋の部分が底であることがよく理解できた。羊糞といえば、までい室での処理方法もユニークである。刃をはずした裁断機のくぼみにプラスチックケースを固定して、カッターで2cmずつ輪切りにしていく作業を初めて見た時は、誰がこんな方法を発明したのか！と感心したものである。ちなみにまでい室には何人かの羊糞ぎり名人がいる。羊糞の処理は、先ず15枚のビニール袋に2cm刻みの数字とバイアル番号をマジックで書いて、切った土壤をビニール袋に落としこんで、バイアル詰めするので、までい室でもかなりの手間作業である。今回の実習で採取現場とまでい室の連携作業で有意の調査結果が得られることが実感できた。

「サークルまでい」が夜の作業から、参加者が増えて昼の作業になってすでに久しい。この度メンバー皆で避難指示が解除されて半年になる飯舘村を見学するというツアーが実現しました

私もイノシシの解剖と金一さんのところの桜の植樹に出掛けただけで殆ど村のことを知らないのです

以前見たフレコンバツクの山積みは一段と増え、道沿いの谷のようなところは車窓から廃棄物がどこまでも続き異様な景色になっていました。

長泥への道は今も通行規制のゲートで遮断されていて、「村ってか部落がなくなるのかなー」と言われた鳴原長泥地区長さんの言葉を思い出しました。

宗男さん宅の古い物置は「再生会事務所」に生まれ変わっていました。事務所前の試験田は黄色く実っていて、これも初めて見ました。「マキバノハナゾノ」では10才から花作りをされて今や花仙人の金一さんの側に可愛い子猫が4匹もチョロチョロしてました。この地区では金一さんだけはが帰ってこわれを走るがそうです

車窓からは凄く立派な家もたくさん見え、荒れ果てた家もたくさんありました。途中、バスの前をイノシシが横切りました。除染の人が沢山村に入ってからイノシンを捕獲出来ずその後の採取は止まつたままでしたが、世代交代したイノシンの線量はどうなつてるのか気になりました。太陽光発電の設備も見えました。車を走らせながら、なぜか新たに戻つて来て動いてる人は見えなかつたです。何戸かは新しい方が帰村されたと思うのですが。飯館村は家と家の間が凄く離れているのですね。帰村された方たちの交流は?と気になりました。会えたのは案内して頂いた田尾さん、役場の職員の方、山津見神社の権禰宜さん、再生の会で復興に頑張つておられる菅野宗夫さん、小学校跡の公民館を説明して頂いた菅野永徳さん。永徳さんは帰村前の報告会で「年を取つてこれから家に戻つてきてどのような生活をしていけばいいんだかな」と話されてました。山津見神社の歴史や文化をとても大切に考えていました。

村の再生を引っ張つていかれる方々と帰りたくても帰れない方、一言で帰村と言つても言葉通りにならない課題が凄く凄くいっぱいなのだと思つました。

宗夫さんから「見える化」の大切さを有難うと言って頂き、せめて農学部地下のサークル室で飯館村から送られる土壌や米、植物のバイアル作りを頑張らなくてはと背中を押して貰つた感じがしました。

田尾さん、宗夫さん、忙しい中を色々と案内して頂き本当にありがとうございました。不謹慎な言い方かも知れませんが、こんな大変な状況にあっても、全体的にみて飯館村はとても豊かな村という印象を受けました。日本で一番美しい村の一つだった事が頷けました。どんなに長い時間がかかると飯館村は再生を果たしていくのだろうと思つました。私はどこまで見られるのだろうと。土居千代

#### 東日本大地震と原発事故

2011年3月の東日本大地震大津波の発生以来、その年の四月に日本物理学会誌に発表された放射能汚染地図で、降雨による放射性元素の落下地点の移動を知つた。しかし政府と報道が示す、放射性元素の汚染の情報は六年も経つた現在、一般国民の意識から明らかに意識が薄らぎつつある。今回2017年9月11日と12日の飯館村の見学旅行で私は以下の印象を持つた。

百三十年前に入植したと言う飯館村はそれほど開拓が進んでいると感じなかつたが、とにかく避難命令のためか、人家に人が住んでいる気配があまりなかつた。これから、災害後六年も経つた飯館村に、どうやって人が住むようになるのだろうか。

人が社会生活をする場所は「生命の安全」が確保されることが望ましい。とくに従来存在した自然環境に原発などを作るには、その事業目的採算と地域雇用や開発の利点ばかりではなく、一旦人為的や自然的災害で原発に災害が起こつたときに、その地域にどれほどの損失が起きるかを「予測する必要」があるし、これは原発を設置する政府の「国民に対する義務」である。日本の原発については、欧米諸国のように地盤が磐石でないことに対する設置評価がないがしろにされて来た。

日本は地震王国であることを忘れ、福島第一原発の設計は技術者として考えられないような落度が何箇所もありながら、非常発電設備に関して看過されて來た。原発事故がおきた後処理も、考えられないような、おかしい処置が日本では起つた。

#### 飯館村の状況

さて今回、原発事故後の飯館村の各地を東京からバスで、二日間見学して回つた。地図で示された地域は数十キロ四方なのだろうが、とにかく家はあちらこちら建つてゐるようだが、人が住んでいる気配がない。村役場の説明では、六千余人の住民がいたがその二割位が戻つてくる予定だと言う。それはかなり希望的観測かも知れない。六年前に強制避難命令が出て、住民が退去させられたあと、立入許可が出るのに時間がかかり、住居許可が出るのに時間がかかつたことが、住民が生活復帰をもはや望まなくなつた原因と思われる。さまざまの団体が住民の復帰を支援しているし、地方自治体としても、さまざまな財政的支援を準備しているが、支援金をもらって戻りたくないと言う住民が多いと言う。

## 放射線災害への憂慮

今回のバス旅行で飯館村を見学すると、至る所農作地に「汚染土土嚢」が積上げられていた。説明では、これは一時的な処置で、いずれは県外に運び出すと言っているが、実情はこの村には現在「生業」がないので、「汚染土土嚢」を自分の田畠に置いてもらう事による収入がこの地の農家の収入だと言うのだ。とにかく当初は当局が思っても見なかつた状況が実際には展開していると言う。

## 取残された災害汚染

政府は農地や宅地に対しては、表面汚染土の除去を強く推進している。しかし、森林原野に対しては樹木や表土の汚染除去は行っていない。ところがこの地域は、降雨や降雪で放射性元素が滴下して地下水や灌漑溝に入り、最終的には耕作地で農作物に取り込まれることになると考えられる。このような流出放射性元素の量がどれほどかは、いろいろの条件で実測して見なければ、言明することは出来ない。この研究は農学部博士課程のかつこうな論文課題になると思う。原発災害が起こって六年も経過したので、放射能半減期の理論からすれば、新奇性がない研究かも知れないが、必要な検討ではある。

再生の会のふところ

再生の会も財源確保の名案があれば、それに越したことはない。放射線汚染の問題がなくても、米や山菜などを販売することに困難があると言うならば、ネット販売やバスツアでデータ上問題がないことを説明した上で、会員扱いにして販売すれば問題はないと考える。私は「飯館村の米」が特上米だからと言う理由で一キロ千円も払うほど裕福ではない。宅配企業と提携して低廉な宅配料金が実現出来れば、「再生の会」に貢献すると言うことで、一キロ千五百円くらいで会員販売したら良いと思う。また正月用に切餅または団子餅にして売ることもできるだろう。要するに、再生の会の活動を支援する道具として使ったら良いと思う。それには、頻繁に現地に戻った人々の情報を発信することが必要だ。場合によっては、季節の飴など「甘いもの」も出来る。

徳川文武

1 セシウム137の半減期が30年。あれから6年。生きの人々は暮らしを求めて移動してしまっている。無理もないことだ。

2 このたび自ら測定して $10\mu\text{Sv}$ だったゲート前地面の線量がたとえば、 $0.2\mu\text{Sv}$ になるには、およそ2の6乗分の1にあたるとして、 $30 \times 6 = 180$ 年かかることになろうか。

3 日本でかの天明の大飢饉のおきたのが約230年前。村でも60軒ほどあった農家のうち、たった3軒しか残らなかつたとの話を今回聞かされた。遠い昔の話がいまも生きているのだ。

4 村の総面積の75%を占める森林に安心して入れるのは、いつのことになるのだろうか。また、それまでの森の扱いはどうするのか。臨時にはいるのはそれとして、一般にはどうするか。昔のタブーの感覚にたより、「入らずの森」として入林制限をかけていくしかないのだろうか。

5 それは必要だろう。しかし、それだけでは面白くない。抗いたいところだ。たとえば、まずは家屋のまわりのいぐねから除染をすすめ、それをたとえ、10メートルでも、20メートルでも広げていきたい。そして農産物を工夫しつつ、また農産物以外の産業をおこしながら、生き続けたいところである。

6 現地の人はやるといっている。ならば細腕をもって連帯したい。今回のツアーを通してそういう感じた。丹羽國博

丹羽國博

(追記)

われらはよそものである。クロサワ映画‘七人の侍’を持ち出すまでもない。

といって、われらもいまやそう初（うぶ）ではない。

世の中でめしを食ってきて、失敗も成功も経験してきている。

いまは皆、なんでも来てごらんといいたいほどの気持ちでいることだろう。

これはすなわち、現地のすぐれた農民の方々とともに“七人の侍を越えていく”

動きなのである。

飯館村見学バスツアーから2週間。レビュー福島で9月18日に放送された"「約束」飯館村の花仙人"を見る機会がありました。

小宮の大久保金一さんの、原発事故前からこれまでの奮闘の道のりと、若い学生達との交流を淡々と記録した番組でした。

その中で、今年4月1日避難指示解除後数日して、金一さんが独り言のように話した「解除前と何も変わっていない…」という言葉に強く共感しました。

ツアー中、車窓から見る村には人が活動している様子は殆どなく、真っ先に訪問した村役場にも村民の姿はあまり見受けられず閑散としていました

この8月11日にオープンした道の駅「までい館」では、僅かに、買い物や食事を楽しむ人々の賑わいを感じることができましたが、村役場での説明では、実際に帰村しているのは村民6000人余りのうち5%のみ、まだ95%は村外にいるということでした。

これから飯館村に必要とされるのは若者の力！ひとりでも多くの若者が躍動できる環境を整えることでしょう。

さきのテレビ番組の中で、金一さんが見せた心からの笑顔、それは「いいたて花壇」を作りに訪れた学生達を迎える笑顔！でした。父親の代から苦労して開墾した土地を放射能汚染から守ろうと踏ん張る花仙人を支える若者たち。金一さんは学生達との交流に勇気づけられると話していました。

再生の会の活動も、若者たちにどう繋げていくのか、それがこれから的重要な課題になるだろうとの思いがしています。丹羽泰子

丹羽泰子

「いつか帰らん愛のふるさと」と書かれた書が新しく出来た道の駅「までい館」の入口に飾られ、生産者の顔写真に農産物、沢山のオブジェや花に彩られた素敵な施設で利用者数が五万人を越えたと盛況を伝える報道に喜ばしく思います。けれど風評被害は収まった訳ではなく、実はこの道の駅が開店された際に配慮の欠けた投稿がFACEBOOKにされており、帰村しようとする人達を悲しませてしまわないか心配しておりました。美しき村に選ばれた農地に置かれたフレコンバックは異様な圧迫感を与え、互いが遮蔽する構造にしているのが知られていない為に数の多さと比例した放射線量を放っている誤解を与え、第一、農業復興の妨げになっているのは残念としか思えません。政府は復興のシンボルとして箱物の建設を進めていくのですが、美しく稔り豊かな田畠牧草地等稼業となる農業や畜産の復興無ければ戻りえぬ故郷になってしまふように思えてなりません。今回参加させて頂きありがとうございます。大変お世話になりました。普段見る事が出来ないところまで見学出来た事に感謝しています。 増田茂

増田茂

先日のバスツアーや、関係者の皆様には大変お世話になりました。28年2月2日よりサークルまでいに参加、その後4月の桜植樹、10月は伊井尚子さん高木さんと共に村の方々を訪問、93歳の元気な次男さんにもお会いしてきました。

3度目の飯舘村入りになった今回のバスツアーは、田尾さんや宗夫さんの説明を受けながらの村内巡りをして全体の様子を見る事が出来たのが大変良かったです。バスの車内から見る景色はちゃんと手入れがされていて村内は綺麗、しかし本来は稲穂が揺れもっと綺麗なはずなのに・・フレコンバックの山だらけで切ないですね。放射能計測器を持ち歩いたり身につけたりは初めての体験でした。また、いつもまでい室で見るサンプルの採取方法の実践は大変参考になりました。今までではサンプルしか見てなかったけど今度はより現地に思いを馳せながらバイアル詰めなど頑張れそうです。ふくしま再生の会事務所、なかなか良く出来ていて居心地良さそう、でも宗夫さん自宅が無いのが残念です。小宮の金一さん、あれだけの広い敷地の手入れは大変ですね。マキバノハナゾノを見に来てくれた人の喜ぶ顔が金一さんのエネルギーの源かと思います。来春は是非また花を見に行きたいです。おじまふるさと交流館は元小学校との事で広々していてゆったり、校庭、体育館、調理室、手洗い場など懐かしかったです。

今回はほとんどのまでい会員さんが参加されたとの事で皆さんと交流が持てたのが本当に良

かったと思います。

本当にありがとうございました。

三浦優子

飯館村訪問は4回目となる今回のバスツアー、今まで訪問してきた場所の変化を避難解除帰村開始という節目の年に見ておく絶好の機会であった。帰村は変化のある避難生活から元の安定した村での平穏な生活再開であるというイメージがあるかもしれないが、実際は大きな社会変動の渦中に再び飛び込むような厳しい側面も帰村にはあることを今回のツアーで感じた。帰村を始めた村民の生活がどうであるか、煮炊きをしながら数泊すればより知ることもできたであろうが、まず、飯館村の「道の駅」に行っても「道の駅」で期待される地元の野菜はなく、遠方から取り寄せた野菜が店頭に並んでいることにまず驚いた。自給自足が当たり前だった村に戻っても、アクセスできる食べ物は村外のものであるという現実に村民は直面していると考えられる。

村役場で、担当者から村の復興に向けて特に一次産業である農業の復興プランを推進したいという説明を受けたが、まず、かつて当たり前だった自給自足の生活経済を立て直すことにも力点を置きべきなのでは？と感じた。村役場には、セルフサービスで簡易測定できるNaIシンチレーターがあり、記録から自家菜園でとれた野菜、旬の山菜、キノコ、イノシシ肉などのジビエなどの測定ニーズが高いことがうかがえた。飯館村の農産物を消費者に安心してもらえるかたちで市場にのせるという意味で規制値をクリアすることも大事だが、これらのより問題の多い特に山菜やキノコ、ジビエといった部分で、村民の健康が担保できる測定値をめざすことが、までいライフの質の向上を狙ううえで重要なに思われた。避難先の村外に出れば美味しいかもしれないかもしれないが安く便利に食料にアクセスできることを考えると、飯館村ならではのまでいライフの満足度を高める試みは重要であろう。サークルまでいも生活環境情報支援として、オンデマンドなサンプル測定を継続していくことで、村民に貢献できるように思われた。

農業に関して付け加えれば、担い手の高齢化や人手不足ということを考えると、大規模な雇用型の営農を現時点で目指すことは多少非現実的に思えた。小規模といえど宗夫ハウスのような家族経営で周年栽培を目指す施設型農業をいくつか実践するのが良いように思えた。宗夫さんにイグネを燃焼させて採熱を目指すための小型の炉をみせていただき、自分たちで維持・管理できる農業を実践することが村の自立につながるのだと感じた。優良農地に積まれたフレコンバックの山や荒れ果てた牧草地を見るとシビアな気分になるが、将来的には銘酒やブランド牛の再興という夢も広がる。

金一さんの飯館花壇は印象的であった。これは若い世代のひとたちと一緒に協働して出来上がったものだ。若い世代の人間関係のネットワークという単に公共事業をやっただけでは手に入らない資本が、この飯館花壇で培われている。飯館村の予算規模は大きいが、何か事業をやってそれにビジネス目的で業者が応札するという構図では、次世代の人的ネットワークは構築できないように思う。山津見神社もその例である。山と積まれたお神酒の量は飯館村の人的ネットワークの潜在的可能性を示唆するものであった。

自身は一介の大学職員にすぎないが、村民の願いと希望に寄り添い、までいライフを協働の場を通じて互いに享受できるような、内発的で主体的な取り組みに大学も側面的に貢献していくことができよう。それには村民の生活をもっと知る機会（できれば数日のステイ以上）がもっと若い人に提供されることを期待する。

渡壁典弘